

沢村貞子著「寄り添って老後」新潮文庫、新潮社 1994 年 12 月 25 日刊を読む

老いるということ

1. 花屋の帰り——菊を抱えて、いつもの細い道を通った。昨夜の雨がすっかりあがって両側の門や垣根にやわらかい陽がさしている。昼さがりの住宅地は、通る人もない。
2. ゆっくり歩いていると、うしろの車から若い女の人のよくとおる声。
「ご町内のみなさま、選挙の日が近づきました。あなたの一票をどうぞ大切に。どうぞ、どうぞ、投票をお忘れなく……」
3. 選挙の広報車である。そう言えば投票日まであと 2 日……是非行かなければ。投票用紙に書く人の名も、もう決めてある。
4. それにしても、こんな狭い路地まで、ご苦労さまなこと……立ち止って除けている前を通りすぎる車から、もう一声。
5. 「みなさま、どうぞ投票をお忘れなく……あ、おばあちゃんも是非行って下さいね」
え？ おばあちゃん……て、私のこと？ 思わずまわりを見廻したけれど——誰もいない。
(私のこと……おばあちゃん、だって……)
遠ざかる車が、妙にしらけて見えた。
6. 家へ帰って菊を活けていても、なくとなく面白くない。つい、家人にその話をすると、笑い出した。
「そりゃあ、まあ、嬉しくはないだろうけれど…… 80 才すぎたら、やっぱり、おばあちゃんじゃないかな。お婆さんや奥さんより、親しみをこめたつもりなんだよ、きっと」
7. そう言われれば、そうかも知れない。それにしても、おばあちゃんと呼ばれると、老いのラベルをペタリ貼られたような気がして——やっぱり、侘しい。
8. 女優をしていたとき、いつも老母役だからスタッフから、おばあちゃんと呼ばれるのが当たり前だった。ところが、仕事が終わったあと、嫁や孫役から、「おばあちゃん、ご一緒に帰りましょう」などと言われると、つい「どうぞお先に——」などとニべもない返事をしてしまうのは——われながら、おかしい。
9. 何年か前、新聞のコラムに、45 歳のお嫁さんから見た、77 歳のお姑さんの心境が載っていた。近くの病院で胃腸の手術をしたお姑さんは、しきりに帰りたいがった。完全看護のため、付き添って

いられないお嫁さんはとても心配だったが——何日かたつと、お姑さんはすっかり落ちついて機嫌きげんがよかった。そのせいか、術後の経過も順調だった。ある日、お姑さんが小さい声でお嫁さんに囁ささやいた。

10. 「ここではね、看護婦さんが、私のことをチャンと名前と呼んでくれるんだよ。名前を呼ばれると、本当に私のことを心配してくれるんだな、って嬉しくなって、気持がシャンとするんだよ」

11. 息子夫婦や孫たち、ご近所の人たちからも「おばあちゃん」としか呼ばれなかったお姑さんはよっぽど嬉しかったらしく、退院後もしいそいと病院へ通った。外来でもキチンと名前を呼んでくれる、とお嫁さんに報告する顔は、子供のように明るかった……という話。たしかにおばあちゃん、という呼び名には、とし齡をとると、じっばひと十把一っからげにされてしまうような侘しい感じがある——私達老女のひがみかも知れないけれど……。

12. 子も孫もない私は、めったにそう呼ばれることもなかったもので、つい、いい気になっていたものの——やっぱり齡は齡。寄る年波のつれなさ、という言葉がこの頃ごろつくづく身にしみていた。

P9 ~ 12

<コメント>

人の名前をフルネームで言うことは人間の尊厳の基本中の基本であることを、この沢村貞子さんの文章は教えてくれる。ありがたいことだ。

— 2016 年 7 月 23 日 (土) 林 明夫記 —